

教育美術・佐武賞 選考を終えて



公益財団法人教育美術振興会
教育美術・佐武賞 担当理事

橋本 光明

信州大学 名誉教授

「教育美術・佐武賞」は、人の年齢で言えば「還暦」を迎えました。この節目に当たり、昭和、平成、令和の時代にわたって美術教育に関する実践研究をお寄せくださいました1,000名に及ぶ全国の応募者の方々に改めて敬意を表します。

とりわけ今回は、区切りの回と応募者の意向とが偶然とはいえ符節が合い記録的な応募数になりました。賞の名称が現在の「教育美術・佐武賞」に改められてから四半世紀近くなりますが、例年の二倍に膨れあがり最も多い25点が集まりました。

毎年、さまざまな学校種や経験年数の方々の応募が各地からあります。今回はこの増加も著しいですが、研究生や行政などの他に特定非営利活動(NPO)法人の応募が加わりました。応募要項の「その他の機関」の広がり、美術教育が地域や社会と関わり合い、その役割や存在意義を示すことにつながります。特色ある実践研究が今後ますます増えることを願っています。

美術教育による生活や社会の中で豊かに関わる資質・能力の育成が今日求められています。生きて働く「知識」についてゲスト選考委員の守屋正彦先生は、「教養」の重要性を話されました。生きて働く「知識」が身に付くとはどういうことか、知識の積み重ねが会話や立ち居振る舞い、文化的素養、心の豊かさの形成に結びついているかを改めて考えさせられました。同時に、クリエイティブな人間の育成の必要性も語られました。

守屋先生の意見や感想などから美術教育で通用する用語を確認したり協議内容が深まったりしましたが、選考の信頼性や公平性などを担保することからもゲスト選考委員を委嘱する意味や役割は大きいです。ゲスト選考委員を置くことは、第一回の1966年から続いてきました。ただし第42回までは「ゲスト」と呼ばず、「外部から迎えた選考委員」としていました。

当初の選考委員は外部2名、美術教育2名の4人構成でした。最初の外部選考委員は、波多野完治氏(当時:お茶の水女子大学教授)、今泉篤男氏(当時:国立近代美術館京都分館初代館長)です。美術と心理学が相互に影響し合いながら新たな展開を示していた

頃であり、波多野氏等の訳、ルドルフ・アルンハイム著『美術と視覚』(美術出版社)は当時の必読書でした。現在の全国の美術館数は1,000館を優に超えますが、1966年頃の数に僅か65館ほどでした。翌1967年に京都国立近代美術館が分館から独立したことで館と館長共々話題になりました。第60回のゲスト選考委員が山梨県立博物館館長であり不思議な巡り合わせと言えます。

今年で“暦が還る”ことから賞が設けられた頃に触れます。先述のとおり最初は「佐武賞」でした。研究論文と実践報告は別々に募集し、佐武賞は全体の中から1点選ばれました。因みに第1回は、佐武賞1名、佳作4名が受賞されました。第60回の教育美術・佐武賞は、佐賀県の西九州大学准教授の新井馨氏、佳作賞は東京都大田区立田園調布中学校教諭の松尾英治氏です。還暦は、再スタートでもあることから次の3点を加えました。

- 「奨励賞」の新設:問題提起、研究内容、検証方法、成果等に新規性や有用性、特色や価値などが見出された場合
*奨励賞は、佳作賞と同様に複数受賞もある
- 「教育美術・佐武賞」「佳作賞」受賞者の実践研究を誌上の他に動画にしてネット配信することを今回正式に発表
*前回受賞者には、受賞後に承諾を得て今年1月に実施
- 「全ての応募者の実践研究について選考委員からの一言選評」を本誌(pp.36-37)に掲載

初の奨励賞に選ばれたのは、大阪教育大学附属特別支援学校教諭の花田知恵氏でした。

さて、名称に戻りますが、第16回(1981年)から「佐武賞」を「教育美術賞(佐武賞)」に変更し、研究論文がA部門、実践報告がB部門になりました。第37回(2002年)からA、B部門が一本化されて「美術教育に関する実践研究にもとづく報告または論文」として募集することになりました。第41回(2006年)に名称が「教育美術・佐武賞」となり、募集要項も「美術教育に関する実践研究(報告または論文)」に改められ現在に至っています。

第1回の選評に「美術教育を人間形成の基礎とする考えが、単なる概念や思想の問題としてでなしに『実践』の問題として、毎日の指導のなかでとらえられている」、「何年かの汗の結晶であり、貴重なもので、いずれも誌上に掲載すれば、それだけで読者を啓蒙する豊かな内容もっていた」とあります。一回目から学校現場の優れた論文が集まっていることが、「教育美術・佐武賞」の厚みや豊かさによる水準の高さを表しています。

過去の受賞者の論文は15年程前の第46回からネットで公開しています。今年の受賞者の口頭発表の動画は準備ができ次第配信します。チラシもご覧になり奮ってご応募ください。

(はしもと・みつあき)

教育美術・佐武賞 選評



ゲスト選考委員

守屋 正彦

山梨県立博物館 館長

AIの発達で、私たちの未来は大きく変わろうとしています。レジや受付、自動運転など、人間の職業はAIに取って代わられる時代を迎えました。知識量もAIが優れています。おそらく入学試験も、学習指導要領もAI時代にふさわしいものに変化していくでしょう。とは言え、AIは人間の持つ創造性を超えることはできないでしょう。美術教育はAI時代のクリエイティビティと言ってよいでしょう。

このたび、わたしはゲスト選考委員として美術教育にたずさわる先生方の投稿論文を拝読する機会を与えられました。先生方がどのように悩み、実践され、自らの教育法を模索しているかを知ることができました。投稿された論文はどれも珠玉の研究です。どのようにしたら授業を通して、学びを理解し、創造性を育むことができるか。それぞれの先生方の思いが伝わってきます。

教育美術・佐武賞に選ばれた新井馨氏の論文は保育園でのアートワークショップによって子供が主体的に造形活動を行う

ようになっていく過程を子供・保護者・保育者の変化から観察し、造形活動が引き起こす連鎖を研究視点として書かれています。教え授けるといった一斉保育から主体保育へと変わっていく過程について、子供の変化ばかりではなく、保護者も保育者もこれまでのあり方から保育に対する意識が変わっていく姿をとらえています。未来志向の造形教育を担う説得力のある論文でした。

佳作賞に選ばれた松尾英治氏の文章は美術室経営についての提案です。学校現場での美術教育のありかたは様々であろうし、学校の都合では通常の教室で行う場合もあると思います。絵を描く、彫刻する。平面でも立体でも造形表現は多面的にとらえます。それは単なる知識ではなく、造形上の洞察力を涵養します。本稿は生徒の主体的な取り組みを育む理想的な美術室のあり方を構想したみごとな提案であると評価します。

奨励賞に選ばれた花田知恵氏の論文は美術館での鑑賞活動を通して、美術作品に向き合い、見方、感じ方を共有し、自己理解・他者理解を育むという内容です。授業では鑑賞活動と表現活動を一体化することで、主体的な学びの実践が行われています。対話型鑑賞の意義を論じた優れた論文であると考えます。

拝読した論文はどれもが美術教育を実践するうえでの重要な視点を提供しています。美術は空間や対象を多面的にとらえます。それは、知識ではなく、表現を通しての認識です。学校は知識の習得だけが生徒を評価する基準ではないでしょう。AIが進化する将来において、子供の未来を育む美術教育の重要性を声高に喧伝したいものです。

(もりや・まさひこ)

プロフィール

東京教育大学大学院修了、博士(芸術学)。筑波大学名誉教授、太田記念美術館理事。山梨県立美術館学芸課長を経て、筑波大学教授。2018年に館長に就任。研究分野は武家肖像画や垂迹画などの日本近世美術史で、特に日本・東洋における儒教美術・礼拝空間についての論考が多い。

主な著書に『すぐわかる日本の仏教美術 改訂版』(東京美術、2010)、『近世武家肖像画の研究』(勉誠出版、2002)、監修『日本美術図解事典 普及版』(東京美術、2011)などがある。





小松 佳代子

長岡造形大学 教授

教育美術・佐武賞の選考に初めて携わり、応募論文、選考会から多くのことを学びました。美術教育実践を文章にすることは非常に難しいということも改めて感じました。実践のどこに焦点を当てるのか、それをどのように意味づけるのかという問題に加えて、実践の場を生きる教育者と実践を省察する研究者の視点の両方を持ち合わせる必要もあります。子どもの変容を何によって捉えるのか、その授業場面に立ち会っていない読者に向けてどう記述すれば伝わるのか、非常に難しい課題です。このような難題に果敢に取り組んでくださったすべての応募者に敬意を表します。

教育美術・佐武賞に選ばれた新井論文は、教育者と研究者の両方の視点に立ち、子どもと保育者との相互作用によって園全体の造形活動の質が変わっていったことを多様な分析方法で見取っています。特に保育記録の「主題分析」と「エピソード分析」によって、「子どもの変容があったからこそ、保育者の視点も変わった」ことを見出している点が秀逸です。「子どもの変容」や「保育者のまなざし」といった本来捉えがたいものを、保育者との協働と実践への深い鑑識眼によって明らかにしたことを高く評価します。

佳作賞に選ばれた松尾論文は、「美術室運営」という独自の視点からインクルーシブ教育を考えるものです。題材設定や教育方法を主題とする実践研究が多い中で、ハード面から美術教育を見直す意欲的な報告です。美術室の空間デザインや、生徒が主体的に行動できるようなピクトグラム、サイン計画だけでなく、心理的安全性を確保する人材配置にも言及しています。学習の補助・心のケアに関わるメンター系人材と、探究の支援を行うクリエイター系人材を配置することで心理的安全性を確保しつつ、レベルの高い表現を支援する仕組みを構築する提言には目を開かされました。

奨励賞に選ばれた花田論文は、生徒の特性に合わせた鑑賞活動から表現活動への展開を丁寧に記述している点が評価されます。作品選択と事前の準備によって、発語が難しい生徒も「みる」「かんがえる」「はなす」「きく」という一連の対話型鑑賞のサイクルに参加できるという視点は、特別支援学校に限らず鑑賞教育の可能性を広げています。表現活動における生徒の変容は、日常的な実践の積み重ねの賜物だと思います。

全体を通して理論と実践との関係を考え直しました。理論を実践に当てはめるのではなく、理論を参照しつつも実践のただ中で実践者なりの理論を立ち上げ、当の理論を問い直すことさえあると思います。豊かな実践にはその力があります。

(こまつ・かよこ)



佐藤 昌彦

福島学院大学短期大学部 教授

何を大切に考えて子供の前に立つのか。そしてどう具現化するか。それらの問いに真剣に向き合い、誠実に実践する素晴らしい取組に触れることができました。

教育美術・佐武賞の新井馨氏の大学と保育の現場との連携に関わる実践は、保育者が抱える造形活動への苦手意識を乗り越えるための具体的な支援のあり方について学ぶことができるものです。「(子供の) 表現の幅が広がり」「(保育者の) 関わり方が変化した」という園長の言葉に関する状況や保護者へのアンケートにおける「園の活動から造形活動の価値をより意識するようになった」という回答などはそうした取組の成果といえます。

佳作賞の松尾英治氏の実践は、中学校での授業において「誰一人取り残さない」という考え方に基づく美術室経営の工夫すべき視点について学ぶことができるものです。一人で集中する時間と対話する時間に配慮した美術室の机の配置、美術室における学校図書館の役割の拡大、生徒全員の作品を展示するための工夫、撮影スタジオの設置など、数多くの具体的な取組を踏まえた内容になっています。奨励賞の花田知恵氏の特別支援学校における実践は、「どのような人間の育成を目指すのか」という教育の本質を問う指導者としての取組について学ぶことができるものです。美術の授業を通して、自分も他者も大切にできる人として成長できる環境を整えていきたいという思いが伝わってきます。また、言葉による表現が難しい生徒に対してのあたたかい配慮も感じます。

教育美術・佐武賞及び佳作賞や奨励賞には至りませんでした。次の六つも魅力的な実践となっています。青森県の先生の実践は、現代アートへの興味や関心を引き出す授業について学ぶことができるものです。北海道の先生の実践は、高学年の造形遊びについての理解をいっそう深めることができる実践となっています。長野県の先生の実践は、鑑賞における「本物との出会い」の大切さをあらためて認識できる実践です。山梨県の先生の実践は、モダンアートの鑑賞で学んだことを表現に生かす授業について学ぶことができます。福岡県の先生の実践は、自立して学ぶ子供を育てるための相互評価活動について学ぶことができるものです。東京都の先生の実践は、「EDUCATION THROUGH ART」と「人間形成としての図画工作・美術」について学ぶことができます。

何を大切に考え、どう実践するのか。自問自答し、ベストを尽くす。指導者のその姿と精神は日本の教育や社会をよりよくするための要です。そしてそうした指導者の姿と精神は次の世代の指標ともなっていくことでしょう。

(さとう・まさひこ)



長田 謙一

東京都立大学 客員教授

本賞は、美術教育実践にかかわる中でこそ見出される課題に自ら解決の道筋をつけ新しい可能性を切開く論を広く公募し、優れた成果に与えられる貴重な賞として歴史を刻み光彩を放ちます。60回記念の今年度は25本もの多数の応募をいただきました。応募論文は、その本数だけの課題と可能性の発見を告げるもので、25本もの数はとりまおさず今日の日本の美術教育の課題・可能性の総覧の核をはらむとも言えそうです。光栄にもその選考委員を拝命し、責務の重大さに身が締まります。併せて、日々の激務の中で応募論文の大仕事を完遂された全応募者に深く敬意を表します。一本一本丁寧に拝読し、言及書籍・論文・美術館資料などを入手して各議論の奥行きを確かめさせてもいただきました。選考委員の私の方が学び／試される、愉しくも過酷な務めに没頭させていただきました。

教育美術・佐武賞の新井論文は、幼稚園教育の中で、更新された美術・造形理解に基づき組織された子どもの造形プロジェクトを通して果たされる子ども自身の変容(既報)が、保育者・保護者の大人たち、さらには園のありかたにまで及ぶ変容の連鎖を生むことを、客観的資料に基づきながら周到に論じて出色です。佳作賞の松尾論文は、美術室とそれに隣接する空間・壁面総体のデザイン・活用・管理に美術教育問題の一環として取り組む画期的視点から課題発見・可能性提示を試みた先駆論文として高く評価されます。奨励賞の花田論文は、知的障害特別支援学校において、対話型鑑賞と表現活動を連携させる授業展開を通して美術の力を育むとともに自己理解・他者理解をも深め、成果を取めたことを論じました。

惜しくも受賞を逃した論文の中では、弘前の新設現代美術館に力を得て「現代アート」に正面から挑んだ青森の中学校における力のこもった実践・論文が目目されます。制作現場に立ち会うようにして現代アートに触れる子どもたちの経験は輝きにみちています。

最後に、少し気がついた問題に触れます。重要な課題に挑み優れた実践を行っているのは明らかなのに、それを論じるために、諸学の基礎問題や術語を用いるあまり議論を不必要に難渋化(時には綻び)させたり、あるいは逆に、今日の優れたカリキュラム設計論などに依拠して授業や評価等を適切に展開するあまり、その過程で生まれた図式等をそのまま継ぎ合わせて論進行に換えかねない行論となって当該論文固有の課題や行論を読み取りにくくしてしまうのを時折見かけました。優れた実践に即し且つ研究的客観性をも有する論を組み立てるのは、それ自体創造的な課題だと思われます。本賞応募を通してその様な論述の言葉・文が今後さらに豊かに創造されていくことを願います。

(ながた・けんいち)



東良 雅人

京都市立芸術大学 客員教授

本年度、教育美術・佐武賞が第60回を迎え、特に今回は多くの応募があったこと、審査員の一人としてとてもうれしく思います。まずは応募された全ての方に心より感謝を申し上げます。

昨年、文部科学大臣より中央教育審議会に対して「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」の諮問がなされ、次期学習指導要領等の検討に入りました。諮問において現代の子供たちは、これまでにない大きな変化の中で激しい変化が止まることのない時代を生きることになるとしています。今回の審査に当たっては、こうした現状も踏まえながら幅広い美術教育を通して、次代を担う子供たちに今、何を育むことが必要なのかということについて真摯に向き合っている多くの実践研究がありました。

教育美術・佐武賞を受賞された新井馨氏の論文は、造形活動を通した子どもの変容が、子供の中だけに留まらず、保育者や保護者といった大人の意識や関わり方に影響を及ぼし、さらに園全体の教育観や方針に波及していく過程を明らかにしようとした研究です。内容では、園で実施したアートワークショップ「アートデイ」において3年間、子供たちの活動における行動や発話、作品等の見取りや、日々の保育日誌の質的な分析、大人に対するアンケート調査など一つ一つを丁寧に読み取り分析している過程が特に評価できる点でした。今回の研究は一園での実践ですが、こうした取組が様々な場所で行われていくことにより、今後“真の子供の学びの場は、大人の学びの場もつくりだしていく”ことの広がりを期待できる実践研究だと思います。佳作賞を受賞された松尾英治氏の実践は、多様な個性や特性、背景を有する子供たちを包摂する柔軟な学習環境を目指した取組です。一人一人の子供に豊かな学びを実現するための「美術室の空間」や「美術室の人材」とは何かを追求する姿は、子供たちの多様性とは何かを考えさせてくれる実践でもありました。ただ、実践報告が主に指導者側の視点から述べられており、実際に学ぶ側である学習者側の視点からの検証があるとより良かったのではないのでしょうか。奨励賞を受賞された花田智恵氏の論文で述べられている、子供の実態を起点とした鑑賞活動と表現活動の相互の関連を図る学習過程の構築は、単に特別支援学校の取組としてだけでなく、どの校種においても考えるべき内容としても今後の更なる研究の深化を期待できるものでした。

応募作品では他にも、受賞には一步届きませんでした。今後の研究に期待できるものが多数ありました。これからの時代を生きる子供たちを育む教育を支えていくのが、実践研究です。今後もそうした報告や論文が多数、教育美術・佐武賞に応募されることを心より願っています。

(ひがしら・まさひと)



横内 克之
東京学芸大学 非常勤講師

私は、大学院から小学校の現場に戻った際に、教育美術・佐武賞への応募に挫折した一人です。6年生の学級担任と教務主任を仰せつかり、二年間の院生生活から過酷な現実に戻れられ、身を削る中で応募論文にまとめるエネルギーは湧いて来ませんでした。今回、選考委員として25本の応募論文が手許に届いた時に、その重さと同時にそこに注がれた先生方の思いをしっかりと受けとめなければ…という気持ちにさせられました。

教育美術・佐武賞を受賞された新井馨氏の論文は、幼稚園でのアートワークショップの実践を軸に、アクションリサーチの手法で3年間にわたる「幼児」「保育者」「保護者」の意識やその表れの変化を丁寧に考察したものです。選考では「変容」という言葉について話し合いましたが、改めて本論を読み返すと、目に見えにくい感覚や感情を含めて園の空気のようなものの熱量がじわりじわりと変わって行った様子に気付かされます。それは、新井氏が「アートデイ」を仕掛ける中で肌感覚として実感したものが中核にあるからに外なりません。それが、閉塞感や疲弊感が広がる学校へのエールになっていることに、力水を付けていただいた感じがします。

佳作賞を受賞された松尾英二氏の論文は、他の論文と異なる視点から中学校美術を取り巻く「環境」の現状分析とその改善に向けた具体的な提言がされています。インクルーシブ教育という括りがなくても、氏の柔らかく温かい眼差しを感じ、そのためのデザイン思考の有意性が強く感じられます。

奨励賞を受賞された花田知恵氏の論文は、鑑賞と表現が切り離せない関係にあるこの教育において、美術館での対話型鑑賞の体験を通して知的障害のある生徒一人一人の育みを丁寧に記述しています。美術館での鑑賞体験が、生徒の見方や感じ方となって形や色に現れ出る過程に、鑑賞と表現を結ぶメカニズムが直線的なものではなく、個に対応した形で求められることを知らされます。

選に漏れましたが、同時代を共に生きた方の大河を俯瞰するような視点やご自分の課題を力強く追究する先生方の実践にも大きな示唆をいただきました。また、東京都小学校教員であった私に、改めて「日々の授業」を意識させられた論文は、日々埋もれてしまう教育実践を見つめ直し、一層の精進をもって造形美術教育の進展に寄与する気持ちと共に、学ぶ喜びに溢れた図工室の子ども達の顔を思い起こさせました。私たちは「つくりだす喜び」の教育に携わる一人一人です。より一歩その実現に近付ける実践をお待ちします。

(よこうち・かつゆき)



第60回 教育美術・佐武賞 本選会終了後に撮影
前列左より西村貞一理事長、守屋正彦先生、橋本光明理事
後列左より小松佳代子先生、東良雅人先生、佐藤昌彦先生、長田謙一先生、横内克之先生

第60回教育美術・佐武賞を迎えて

教育美術・佐武賞は今回で60回目を迎え、全国の先生方から、25件の実践論文をご応募をいただきました。審査の結果、教育美術・佐武賞に新井馨先生、佳作賞に松尾英治先生、そして第60回を機に新設された奨励賞に花田知恵先生との論文が選出されました。お忙しいなか実践をまとめ、お送りいただきました先生方、そして真摯な審査にご尽力いただいた選考委員の先生方に、心より感謝申し上げます。

当会では、受賞論文を誌面で発表するのみならず、第48回(2013年)からは贈賞式を開催し、受賞された先生方を顕彰するとともに、受賞者と選考委員の先生方による座談会を設け、論文に込められた「思い」も紹介してまいりました。

2022年からは、過去の受賞論文の一部を当会ホームページで公開し、昨年度から受賞者による発表動画の配信も始めました。これからも本賞が契機となり、学校現場での実践研究が活性化することを願っています。

令和8年度も先生方からの意欲あふれる実践を心よりお待ちしております。

公益財団法人 教育美術振興会
理事長 西村 貞一

	賞	表題	執筆者	受賞時勤務先
第50回 (2015年)	佐武賞	人とのつながりをつくりだす版画教育 ～子ども同士のかかわりによる造形思考を生かした版画製作と 版画教育を通して子どもと社会をつなぐ「地域連携」～	上北図工部会 川村 英徳・野坂 佳孝	青森県
	佳作賞	学校から地域そして未来へ — 小学校・第6学年 「つながろう～アートを通して広がる世界・広がる生き方～」の実践から —	黒井 美智子	新潟県
第51回 (2016年)	佳作賞	肢体不自由児が“自分でできる”美術の授業づくり —《美術の実態表》と《目標の段階表》による、 個別の題材目標と手立ての設定を方策として —	森田 亮	千葉県
	佳作賞	子どもの心の安定をめざした図画工作科 学習指導 ～セルフイメージを高揚させるための造形活動を通して～	横田 恭典	福岡県
第52回 (2017年)	佳作賞	美術を愛好する心を育てる美術教育のあり方 ～地域活性化アートイベントと学校現場の連携を通して～	井手 淑子	長崎県
	佳作賞	熊本の子どもたちに図画工作科ができること ～イノベーション力を育む一年生の色彩指導～	本山 和寿	熊本県
第53回 (2018年)	佐武賞	生活の中の芸術と関わり、表現活動を通して楽しく豊かな生活を創造する 題材の開発と手立ての工夫	古家 美和	兵庫県
	佳作賞	子供の成長を支える美術教育の実践 ～「マイ・イソップ物語」の制作と鑑賞活動から～	潮木 邦雄	静岡県
第54回 (2019年)	佳作賞	造形的な見方・考え方を働かせ、自分らしく表現する生徒の育成 ～造形的な視点に基づいた思考の力を高める指導過程の工夫～	宮田 栄子	岐阜県
第55回 (2020年)	佐武賞	美術がつなぐ、子ども・地域・学校 ～学校現場が模索した教科融合型学習の試み～	永松 芳恵	大分県
	佳作賞	表現力を高めるための「対話的な活動」の工夫 — ピクトグラム制作を通して —	岡本 真梨	新潟県
	佳作賞	「深い学び」に繋がる中学校美術科の授業 ～造形要素と制作過程を軸にした授業改善と実践～	堤 祥晃	滋賀県
第56回 (2021年)	佐武賞	子供が絵に表す意味と指導のあり方に関する研究 — 量的な基礎研究を根拠とした法則化による描画指導法の検討 —	花輪 大輔	北海道
	佳作賞	生徒の主体的な社会参画意識と創造性を育む プロジェクト型学習カリキュラムの実践と検討	西澤 智子	香川県
第58回 (2023年)	佐武賞	特別支援学級における、子供の「思いをいかに」環境構成の在り方と授業づくり	梶川 明子	山口県
	佳作賞	他教科領域や地域と連携し、子供がつくりだす喜びを味わう学習展開の在り方 ～コロナ禍で表す「海」と「いのち」～	村重 仁美	山口県
第59回 (2024年)	佐武賞	現代美術とは何か？ ～現代美術を理解し、自分なりの解釈で語るための授業展開の試み～	小山 美香子	長野県
	佳作賞	創造的思考力を育むための学びの提言 — 中学校の美術のデザイン領域に関する学びの在り方を考える —	杉原 誠	東京都
第60回 (2025年)	佐武賞	造形活動が生み出す子どもの変容の連鎖 大人への影響と園運営の質向上	新井 馨	佐賀県
	佳作賞	インクルーシブ教育を実践するための心理的安全性が確保された美術室経営	松尾 英治	東京都
	奨励賞	特別支援学校における美術館を活用した対話型鑑賞と表現活動 — 知的障害のある生徒の自己理解と他者理解を育む実践 —	花田 知恵	大阪府

※ 第51回、52回、54回は佐武賞は該当者なし。第57回は佐武賞・佳作賞共に該当者なし。

第60回 教育美術・佐武賞 応募論文一覧及び一言選評

この度、記念すべき第60回の教育美術・佐武賞に、25名もの先生方からご応募をいただきました。まずはご応募いただきました先生方にお礼申し上げます。地域も校種も多様な取組について、今回選考に携わった先生方から一言選評をいただきました。ぜひ今後の参考にしていただけますと幸いです。

地域	研究主題	一言選評
北海道	高学年の造形遊びにおける「空間」についての検討（2） —実践を通じた発達比較による提案—	高学年造形遊びにおける「空間」の捉えに意欲的に踏み込んだ提言である。更なる実践を通して、高学年造形遊びが取り組み易くなることを期待したい。
青森県	深い学びをもたらすための鑑賞計画の立案と授業の構造化 —弘前れんが倉庫美術館〈2021年りんご宇宙—Apple Cycle/Cosmic Seed展〉を題材化した実践から—	「逆向き設計論」に則り、話し合いによる思考の可視化を経て「深い学び」を促す貴重な実践研究。生徒自身が現代アートの価値を見いだしている。
青森県	「単純化・省略・強調」が中学生の構想にもたらす影響に関する実践的研究 —3題材に基づく分析を手掛かりにして—	表現活動の過程を追いながら、主題を具体化する過程である構想を軸に重点が共通する3つの題材を実践し、それらを丁寧に考察する中で授業の質的な改善に向けた姿は評価できる。
青森県	図画工作科における将来的レリバンスの向上を意図したカリキュラム・デザイン ～身近な地域の生活や社会の中の形や色などと豊かに関わることを通して～	図画工作を学ぶ意味を「将来的レリバンス」に見出そうと、地域の教育資源の教材化を通して検証を試みている。一層の継続的な取り組みが期待される。
福島県	魅力的な素材・技法との出会い 意欲的に表現活動に取り組み、美術の必要感を感じる生徒の育成のための題材の工夫	美術の必要性が感じられる魅力ある授業を目指して、生徒になじみのない〈素材〉〈技法〉を授業に取り入れることで、意欲を引き出している点は評価できる。
茨城県	造形的な見方や感じ方を深める鑑賞授業の在り方 —中学校第2学年「発掘！マイ国宝～土偶を語ろう～」における土偶の造形を味わい、作り手の内面や生き方を考える活動を通して—	定説なぞりではない鑑賞なる課題はそれ自体が難問だ。対象選択ではなく、どうしたら自分の「目＝こころ」で真率に見れるか—ここが出発＝到達点でなかったか。
茨城県	肢体不自由特別支援学校における共創的アート活動 「みんなでつくろう！千人おどり」	肢体不自由特別支援学校において、児童・生徒、教員、保護者とともにボランティアを含む多くの人々が共に活動する意欲的な取組になっている。
埼玉県	「本に綴じるとは？」 ～生徒の学習調整を引き出し、主体性を育む授業実践の試み	長年にわたる、ブックアート表現とその鑑賞の往還からなる「本に綴じる」という魅力的な実践の総括。自発性の発現などのより詳細な論述が望まれた。
東京都	生徒の生活感覚を引き出す美術教育 Scratchアニメーション制作を通じた個別支援の基礎理論と実践	生徒が自身の日常生活を能動的に再構築する美術教育の可能性を探究している点は優れている。多くの要素を詰め込み過ぎて論点が拡散してしまっているのが残念。
東京都	自由の実感が生み出す、自己実現を楽しむ図画工作の授業実践 ～「子供に委ねること」への考察とともに～	“自由”をキーワードに自分の意思で意味や価値をつくりだしていくことの重要性から子供の自主性の尊重と教師の指導との調和について考える機会を読む人に与えてくれた。
東京都	総合的な探究の授業から美術教育への還元	理論と実践は研究を推進する両輪だろう。最新の知的スキルや思考ツールに基づく本論が、その実践につながる片鱗なら、授業実践の成果を心待ちにしたい。
東京都	「EDUCATION THROUGH ART」から「美しい心を育てよう」へ	長年にわたる美術・図画工作科の教諭としての足跡を辿りつつ、美術教育のあり方を問う。子どもから学ぶ姿勢を貫く実践記録として貴重である。

地域	研究主題	一言選評
東京都	インクルーシブ教育を実践するための心理的安全性が確保された美術室経営	勤務校における実践の一環として教室・準備室・廊下等の活用・デザイン・マネジメントを論じた本論が、同種の取組みが多数始まることを期待する。
神奈川県	『これからの生きる美術教育の力』 一学ぶ意義を自ら見だし、主体的に学びに向かうことができる子どもの増加に向けて—	学ぶ意義を自ら見出し、主体的に学びに向かうことができる子どもの育成。それを具現化するための教科横断的な授業実践について学ぶことができる。
神奈川県	幼児期の造形表現のテーマ ～幼児の豊かな感性と表現を育むためのテーマ設定～	幼児の日常生活と造形活動との接続など、これまでの長年にわたる経験に基づいた「幼児期が終わるまでに育てて欲しい10の姿」や「表現」領域に対する考察は興味深かった。
新潟県	経験主義と系統主義の統合を目指して	経験主義と系統主義の統合を目指す旅は、「生徒の新しい価値の言葉」に着地したが、論者の思索は尽きることは無い。それ自体が学び方を体現している。
山梨県	モダンアートと児童の造形活動	デジタル教材に傾斜する学校教育で、触覚に関わるテクスチャ・マチエールに着目した取組みは、図画工作が学校教育に位置づく意味を教えてくれる。
長野県	ファインアートにおける本物との出会い ～鑑賞することで培われる感覚や感性～	「本物の作品」と出会う場を設定し、模写や対話型鑑賞などを通じて、メタ認知能力につながる実感を伴った理解を促している。地域との連携も素晴らしい。
長野県	美術の非造形性をめぐって ～表現と鑑賞をつなぎ、世界への愛着を育む美術の授業を探る試み～	卒業制作「形に思いを込めて」など、中学校におけるこれまでの取組を考察し、今後へ向けての貴重な手がかりを得ることができ実践になっている。
滋賀県	高校の美術の在り方について考える ～地域連携と言語活動を活かした授業を通して～	地域との連携や言語活動の大切さを踏まえながら、高校の美術の在り方について学ぶことができるものである。美術Ⅰと美術Ⅱの内容が丁寧に記されている。
大阪府	特別支援学校における美術館を活用した対話型鑑賞と表現活動 —知的障害のある生徒の自己理解と他者理解を育む実践—	特別支援学校における生徒の自己理解と他者理解を育む実践について学ぶことができるものである。自分の考えの根拠を見出す力に着目した取組にもなっている。
大阪府	ウェルビーイングと美術教育の融和性の高さを生かした実践からの考察 ～わたしたちのより良い在り方を実現していくために美術の時間でできること～	自己を見つめる新たな視点としてウェルビーイングに着目し、教科の本質に迫ろうとするアプローチは興味深く、よりよい方向へ自らの授業実践を向けようとする姿勢が感じられた。
山口県	子供の「表現の物語」は、いつ成立するのか	「造形の語り」を「表現の物語」に実らせていく実践の成果は子どもたちの作品がよく物語っている。しかし未規定な基礎諸概念や文の振れ等は克服されたい。
福岡県	「自立」して学ぶ子供を育てる図画工作科学習指導 表したいことや表現方法を鮮明にする相互評価活動を通して	小学校フェス内でのいかにも愉しそうな2実践の報告と論だが、大状況とウェルビーイングから立論される論が実践の豊かさをとらえきれず惜しまれる。
佐賀県	造形活動が生み出す子どもの変容の連鎖 大人への影響と園運営の質向上	「アートデイ」を通して造形活動から、子供だけでなく保育者、保護者の変容を丁寧に見取り、造形活動の効力や効果、その在り方を導き出している。